報　告

2017年度 聖学院大学総合研究所 カウンセリング研究会 主催
カウンセリングシンポジウム
「信仰者に読んでほしい３冊 ＆ 求道者に読んでほしい３冊」報告

シンポジスト：香山リカ先生（上段中央）
シンポジスト：藤掛 明先生（上段右）
司会：堀 肇先生（上段左）

去る2017年11月10日、2017年度カウンセリングシンポジウムが聖学院大学教授会室において開催された。当シンポジウムでは、立教大学現代心理学部映像身体学科教授である香山リカ氏と聖学院大学人間福祉学部こども心理学科教授である藤掛明氏の両名により、対談（セッション）が行われた。

対談の中では、はじめに香山氏の自己紹介から求道者としての始まりが語られた。続けて精神科医として香山氏は、現代人のストレスが多い生き方と現代人の生き方に「救い」や「癒し」を求める人々が多くなっている傾向を示された。一方の藤掛氏は、クリスチャン心理士としての立場から、多くの人間がキリスト教に興味や関心を持ち、信仰し、あるいはキリスト教から去っていく現状について、信仰者として何か大事な視点を見失っているのではないかという藤掛氏自身のキリスト教信仰者に対する問題意識が語られた。

香山氏、藤掛氏の両名は、お互いに読んでもらいたいセレクションした３冊の書籍をとおし、キリスト教についてのそれぞれ想いを対談（セッション）形式で語り合った。香山氏からは、信仰者に読んでもらいたい３冊という題で香山氏による書籍の解説が行われた。香山氏はマイケル・サンデル著『これからの正義の話をしよう』、堀江恵子著『教誨師』、カズオ・イシグロ著『私を離さないで』の３冊が紹介された。香山氏が提示した３冊について香山氏は、普遍的概念としての正義とキリスト教的正義、死と向き合う者と罪概念とキリスト教、そして不条理、不平等の問題と運命に対するキリスト教的アプローチというテーマを求道者として藤掛氏に問いかけた。それに対して藤掛氏は、カウンセラー（心理士）でもある藤掛氏自身が正義や善悪に対して断定的な立場を持たないまでも、信仰者として正義や罪概念、そして不条理、不平等の問題への関心をさらに深めたいという立場を表明した。一方、藤掛氏からは来住英俊著『キリスト教は役に立つか』、ジョン・オートバーグ著『神が造られた「最高の私」になる』、ポール・トゥルニエ著『強い人と弱い人』が紹介された。藤掛氏はこれら３冊の本から、信仰者自身とイエスの関係や日本人が持つ神概念や罪概念の捉え方、そして魂や精霊の霊的成長について言及した。これに対して香山氏は精神科医の立場から、キリスト教を信仰している人たちが何を思い、また信仰者たちとの対話をして信仰者が抱えている心理的問題や人生への指針について興味を示された。

シンポジウム終盤おいて香山氏、藤掛氏への質疑応答に時間が設けられた。質疑の内容として決まった形としての信仰者としての生き方への疑問や、宗教と死への問題などが挙げられ、香山氏、藤掛氏はそれぞれ精神科医、カウンセラーとしての立場と求道者としての香山氏、信仰者としての藤掛氏という立場で応答された。最後に、聖学院大学総合研究所特別研究員である堀 肇先生（鶴瀬恵みキリスト教会牧師）より、全体をとおしてのリスポンスが行われ、盛会にシンポジウムは終了した。多くの対話と話題が壇上において繰り広げ

られた今回のカウンセリングシンポジウムは、例年にはないキリスト教における幅広い議論がなされたシンポジウムであった。

（文責：星山玲於奈［ほしやま・れおな］聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程）